第１回　泉佐野市総合教育会議　議事録

１．日　　時　　令和６年２月１日（木）午後２時００分

２．場　　所　　泉佐野市役所５階　第一会議室

３．出席者

構　成　員	市　長	千代松　大耕
	教育長	奥　真弥
	委　員	赤坂　敏明
	委　員	山下　潤一郎
	委　員	甚野　益子
	委　員	石崎　貴朗
	委　員	谷口　朋

事務局及び関係職員

市長公室長	北川　和義
教育部長	髙橋　和也
教育部理事	樫葉　浩司
こども部長	古谷　信夫
地方創生担当理事	福井　丈司
こども貧困対策担当理事	前田　憲吾
施設担当理事	中野　康
日本遺産推進担当理事	中岡　勝
読書活動推進担当理事	大引　要一
学校給食担当理事	田中　伸宏
泉州国際マラソン担当理事	山路　功三
教育総務課長	鍵埜　和弘
教育総務課教職員担当参事	山岡　史賢
教育総務課夜間中学担当参事	本道　篤志
学校教育課長	田倉　元
学校教育課学校指導担当参事	和田　哲弥
学校教育課人権教育担当参事	渡辺　健吾

学校教育課指導主事　　近藤　輝史
学校教育課指導主事　　橋本　真吾
青少年課長　　洞　　義浩

（庶務係）教育総務課課長代理(兼)係長　　山本　建志

４．議　題

（１）小中学校における不登校等対策について

（２）その他

・泉佐野市の小中一貫教育について

５．議事の経過
（午後２時００分開会）

鍵埜教育総務課長

定刻になりましたので、只今から令和５年度第１回泉佐野市総合教育会議を始めさせて頂きます。

会議に先立ちまして、本日１名の方から傍聴の申込みがありました。総合教育会議設置要綱に従い、傍聴を許可したいと思いますが皆さまよろしいでしょうか。

（各委員　「異議なし」の発言あり）

それでは傍聴を許可いたします。

〔傍聴者入室〕

それでは、開会にあたり、千代松市長からご挨拶をお願いします。

千代松市長

令和５年度第１回泉佐野市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日は、教育委員の皆様方におかれましては、ご多忙の中、本会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、平素より、教育委員の皆様と教育委員会が一体となって、さまざまな課題に対して挑戦し、教育改革を行っていただいており、とりわけ佐野中学校での夜間中学の開設や、塾代等助成事業、小中学校における学校図書館システムの導入といったモデルとなる取組みを進めていただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

本会議は、皆様ご承知のとおり、教育委員会と首長が地域の教育の課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としたものでございます。

さて、今回の総合教育会議のテーマは、「小中学校における不登校対策について」でございます。

様々な事情から、やむを得ず不登校となった子どもたちへの支援につきましては、関係者において日夜努力がなされているところではございますが、その人数は全国的にも近年増加傾向にあり、本市におきましても令和元年以降、昨年度まで同様に推移しており、子どもたちの健全な育成のため、さらなる支援を充実させることが、大きな課題となっております。

児童生徒の望ましい成長を保障できるよう、地域の実情に応じ、持続可能で多様な環境整備を進めていく必要がございます。

長期欠席・不登校対策における本市での具体的な取り組みとしましては、子どもたちの教育の機会確保に向け、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家、家庭の教育機能総合支援指導員や子ども家庭アドバイザー等の支援人材と協働し、心のケアと家庭支援に努めるとともに、不登校児童生徒の居場所となっているフリースクールの安定的かつ持続的な運営及び活動を支援して参りますので、引続きお力添えのほどよろしくお願いいたします。

また、GIGA スクール構想により整備しました１人１台端末等を活用して、児童生徒のメンタルヘルスの悪化や小さな SOS、学級変容などを教職員が察知し、問題が表面化する前から積極的に支援につなげ、未然防止を図って参りたいと考えております。

教育委員の皆様におかれましては、どうか忌憚のないご意見をお聞かせいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

鍵埜教育総務課長

ありがとうございました。

協議に入る前に、本日は中村委員が所用により欠席となっておりますのでご報告申し上げます。

それでは協議事項に入らせていただきます。

次第に従いまして、２協議事項（１）「小中学校における不登校等対策について」でございますが、橋本学校教育課指導主事より説明をお願いします。

橋本学校教育課指導主事

スライドと資料でご説明させていただきたいと思います。

概ね２０分程度でご説明できたらと思っております。よろしくお願いいたします。

「不登校について（状況・とりくみ）」ということで、現状と教育委員会の取り組みについてお伝えしたいと思います。

まず初めに、「不登校とは」ということで、皆さんご承知のところとは思いますが、確認ということで説明をさせていただきたいと思います。

「長期欠席」「不登校」と書いてあるのですが、「長期欠席」の枠の中に「不登校」があるということですが、「長期欠席」は「不登校、病気、経済的、新型コロナウイルスの感染回避、その他の理由により、年度間に３０日以上登校しなかった児童生徒をあわせていう。」ということで、その中で「不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあることをいう。」ということで、学校の方から調査した状況について聞いております。

続いて２番、「不登校の状況」です。

こちら本市の状況ですが、小中学校における不登校の状況ということで、それぞれの年度ごとの不登校児童生徒数の推移を表しております。最後の令和５年度、それぞれの表の一番右ですが、下に下りていると思いますが、令和５年度１２月末段階ですので、まだあと３ヶ月ありますので、これは参考値ということで令和４年度までを見ていただけたらと思います。

左図の方は、小中学校不登校児童生徒数になります。青色が小学校、オレンジが中学校、灰色が合計となっております。合計の方で見ると過去５年間で約２倍に増加しております。とりわけ小学校で、過去５年間で約４倍増加ということで、小学校の増加が全国的にもそうですが、本市でも大きくなっております。また、右側の方ですが、こちらは新規不登校児童生徒数です。下の※にもあるのですが、新規不登校児童生徒数とは、昨年度は不登校ではなく、今年度で不登校になった児童生徒の数になっております。右側の図を見ると、過去３年間と書いておりますが、私のミスでして、２年間ですが、令和２年から令和４年で約１.６倍増加。とりわけ小学校で、約１.７倍増加ということになります。

続いて、次のページですけれども、「小中学校それぞれにおける不登校の千人率の推移」ということで、今度は割合です。子どもの数は概ね減少していますので、在校の人数から不登校の率、千人の内何人かというグラフになっております。左側が小学校、右側が中学校です。小中学校不登校の千人率も増加傾向にあります。千人率の大きさは中学校の方が高い水準で推移しております。増加の割合は小学校の方が大きいです。国と府を比べますと、本市の中学校は府よりも低く、本市小学校は府や国よりも高い状況になっております。

続いて、「不登校の要因」です。これは令和４年度の「主な理由」ということで書かせてもらっていますが、令和３年、令和２年も概ね同じ様な傾向であります。

「主な理由」の１番は、「無気力・不安」こちらがだいたい４９％で約半数を占めております。続いて「親子の関わり方」「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「家庭の生活環境の急激な変化」「入学、転編入学、進級時の不適応」「学業の不振」と続いております。こちらの項目は国の調査による項目になっていますので、そのまま出しているのですが、「無気力・不安」が１番多いという状況になっております。

続きまして次のページ、先程の現状もありますが、「本市の課題」といたしまして、特に２つ。

１つ目は、「不登校児童生徒の学習機会等の確保（とりわけ小学校）」です。もちろん中学校も大事ですけれども、近年増えている、とりわけ小学校の課題が大きいです。

２つ目が、「不登校の状態にある児童生徒や家庭への支援（とりわけ他職種連携）」ということで、この後説明させていただきますが、学校だけではなく、いろんな関係機関と連携しながらサポートしていくということで、国からも通知が出ておりますが、不登校の数の上昇によりこちらの２点が課題になっております。

「とりくみ」に行く前に次のページですが、今現在の「国の通知等について」少しだけ触れさせていただきたいと思います。数年前とは社会の状況も変わり、考え方や捉え方も少しずつ変わっています。

次のページですが、「教育機会確保法（H28）」ですが、正式には「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」で、８つのポイントということで、順に並べさ

せていただいております。

２点目になりますが、「不登校は問題行動ではない」「誰にでも起こり得るもの」であり、不登校になったからと言ってその子が悪いということではなくて、「不登校自体は問題行動ではない」という捉え方です。問題になるのは、学校に行っていない状況で学習の機会を得にくい、いろんな体験活動、機会が得ることができないことが問題ということで捉えられています。

３点目の「社会的自立の尊重」ということで、「登校するという結果のみを目標としない」「学校に絶対に行かないといけないではない」「学校しかないではない」というところで、「登校だけが目標ではない」ということが明記されております。いろんな関係機関、いろんな場所によって総体としてその子を支援していく、いろんな機会を確保していくということが大事ということでございます。

４点目、「民間連携」ということで、フリースクール等民間のいろいろな場においてその子の学習や生活、いろんな体験活動の機会をつくるというところでございます。

次のページですが、「COCOLO プラン」ということで、こちらは文科省から出されています。令和５年ですが、こういう方針でということで出されています。「誰一人取り残されない学びの保障」、先程も「不登校は問題行動ではない」というところがあったと思うのですが、そこにつながって「学びの保障」。ここが対策しなければいけないということで打ち出されていまして、学びたいと思った時に学べる環境であるとか、小さな SOS を見逃さない、あとは学校が、みんなが安心して学べる場所にしましょうと示されています。

では、５番「本市のとりくみについて」でございます。

まず、「不登校対策サポート委員会」というものを実施しております。趣旨は、不登校生の実態を把握し、必要な支援を検討するとともに、不登校の未然防止に向けたとりくみを検討し、学校現場に反映していく委員会です。構成は、会長、副会長、それぞれ校長会、教頭会から、そして家庭の教育機能総合支援指導員、そして各小中学校の不登校対策担当の教職員等全員に集まっていただいて、月に１度実施しております。

次のページ、「活動」ですが、概ね月に１回、対策及び未然防止に向けたとりくみを検討しております。そして、担当者も含めて専門的な知識の習得のための研修会も行っております。１番直近では、カウセリングマインドの研修。心理的なカウンセラーに心理的なアプローチから子どもの関わりを考える。また、自殺予防や事例検討、実際のケースについてどんな支援ができるかを話し合う研修をしております。

３番、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家、教育支援センター、家庭の教育機能総合支援指導員、不登校支援協力員、市にある支援人材等、また府からいただいているカウンセラーや市のカウンセラー、市のスクールソーシャルワーカーの活用についてもいろんな支援を検討しています。

４番、中学校区別情報交換を行い、小中連携を図っています。小学校から中学校に行くときに、段差解消とよく言われるのですが、なかなか中学校にすぐに馴染めないことも全国的にデータとしてあるので、小中をつなぐためのとりくみを本市では積極的に行っております。

次のページ、「泉佐野市教育支援センター」についてです。

目的は、学校に行きたくても行けない、行きにくい児童・生徒に対し、家庭と学校との中間的な

居場所を提供し、興味・関心ある活動を通して様々な生活体験や人とのふれあいを深め、心のエネルギーを高めていく中で、生活のリズムをとり戻し、学校復帰・社会的自立ができるよう援助することを目的としております。

本市の教育支援センターは「さわやかルーム」と「シャイン」で、府内でも珍しく２箇所設置しておりまして、南と北でいろんな子どもたちを支援、また学校の支援をしております。

活動はたくさんあるのですが、午前中は自主学習活動ということで勉強、午後は創造体験活動ということで、料理、工芸、ゲーム、スポーツ等いろんな行事や人とのつながりをつくるためのものを実施しております。センター長やスタッフ、メンタルフレンドという名前なのですが、有償ボランティアで教師をめざす大学生であるとか、いろんな方々に協力していただきながら個別の関わりを行っております。資料にはないのですが、現在正式に入室していますのは１５名です。市内の中学生が９名、小学生が６名、計１５名が今入室しております。小学生の人数については過去最多となっております。また、資料にはないのですが、１２月、１月、直近のこの２ヶ月で見学希望が増えておりまして６名来ております。その中で４名が小学生、２名が中学生ということで、小学生の子どもたちが増えてきています。また今後も小学生が増えていくだろうと思っております。

次のページでは、「泉佐野市教育支援体制・関係機関との連携」ということで、左上から事象が発生した場合、当然、学校は校内での会議を開きます。管理職や担任、担当関係職員、配置 SC（スクールカウンセラー）、配置 SSW（スクールソーシャルワーカー）、校内支援教室とも呼ばれるのですが、校内にあって、クラスには入りにくい、でも学校には来れる場所を、ということで、別室で部屋を作ってそこで支援をする。全ての学校ではないのですが担当者も配置します。そこから当然、保護者や児童生徒へのアプローチを行っていきます。その中では近年コロナが拡大した時期から ICT 活用ということで、１人１台端末も入ってきて、リモートを使ったいろんな支援も選択肢として入っております。保護者、子どもが選んで学校といろんな条件で調整して、可能であれば ICT を活用していきます。

左下ですが、教育委員会としましては、学校支援チームということで、いろんな支援人材の方と一緒に支援しております。SC、SSW、SL はスクールロイヤーということで法律、学校支援のコーディネーターや教育支援センター長、真ん中横長の家庭の教育機能総合支援指導員がいます。少し触れさせていただきたいのですが、家庭の教育機能総合支援指導員は、学校に来にくい子どもたちの登下校の支援や、学校の中での支援、保護者の相談を聞いたり家庭全体をとおして支援していく方々です。ある学校では、この方がいるおかげで、この方がいる部屋があるおかげで教室にはまだ難しいけれども、別の部屋で学習したり、いろんな子どもたちと先生と触れ合って、学校での教育の機会ができている子どもたちもいます。

その下ですが、生徒指導支援員、子ども家庭アドバイザーと書いてあると思いますが、こちら（子ども家庭アドバイザー）は今年度途中からの新事業となっておりまして、まだ進めているところですが、子どもだけではなくて、保護者を直接支援する、学校からの要請に答えて学校で保護者に対する講演会、又は小人数での茶話会や座談会、ゆったりした雰囲気の中で保護者の方々の悩みを聞きながらアドバイスをしたりというアドバイザーを派遣しております。また、個別やグループでの相談も受けております。

まだ始まったばかりですが、心理と福祉のプロであるアドバイザーの話はすごく的確で、私もず

っと同行しているのですが、保護者の方が自分の悩み等をなかなか普段言えないけれども、こういう場があることで言えたとか、その中で学校とつなげられたとか、いろんな思いを聞いてアドバイスができたというところが、少しずつ進んできております。

最初に来たときとは全然違う表情で保護者の方が帰られていく、そして学校とつながりを深めていけるというところで、まだ事例は少ないですが、少しずつ進めております。

あと、右下にフリースクールとあるのですが、学校教育課としましても、助成金ということでフリースクールへの支援というところも始めております。

最後のページです。「成果・これから」ですが、全国、大阪府としてもなかなか不登校がどうなるかというところまでは見えにくい状況ではあるのですが、細かいところですが、①新規不登校者数を昨年度の同時期１２月末時点で比べると、小中学校あわせて減少することができています。７４人から５９人。千人率でも同様に減少しています。

②不登校の状態にある児童生徒のうち、学校内外の機関等から相談・指導を受けていない児童生徒の割合が減少しております。不登校の状況にあってなかなかいろんな機関とつながれていない子どもたちを少なくしようというところですが、参考値としては令和４年度の４３％から現時点令和５年度２７％ということで、府事業の実施校だけの参考値がございます。年度末には全体の結果がわかるのですが、このような結果からみても、つながることができていると考えております。

最後に「これから」ですが、これからも不登校児童生徒の学習やさまざまな体験の機会を保障できるよう教育支援センター「さわやかルーム」「シャイン」や、校内支援教室の機能もさらに充実させたいと思っております。スールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家や支援人材、関係諸機関とさらに連携して児童生徒や家庭を支援していくというところでございます。

以上で説明を終わります。

鍵埜教育総務課長

ありがとうございました。ただ今の説明について何かご意見ご質問がありましたらお願いしたいと思います。

甚野委員

私の身近にもそういう不登校というお話が何件かあるのですが、ある方の場合はずいぶん前ですが、娘さんが不登校になって、そのあと弟さんも同じように不登校になってしまいまして、そのお家は引っ越しをされました。お父さん、お母さんも職業を変えられて、違う職業についたという状態です。また別の方は、最近の話で、引っ越しとか両親の仕事の変更とかは聞いてはないのですが、なぜ不登校になっているのかということについて、主な理由として資料では「無気力・不安」とか「親子の関わり方」とか「いじめ」とか、色々書いていただいているのですが、ご本人の中では、複合的に絡んでいる事例になってくる、特にいじめがあったからとなるかもしれないですが、それプラス家庭の事情とか、又は転校した時に不安感があって、それで人間関係とかがあって、色々複合的に絡んできて結局学校に行くのが疎遠になっていくという感じで、はっきりこれという理由ではなくて、ぼんやりした感じで遠のいていくという感じの事例だったのですが、そうなった時にご家庭の人たちの様子を見ていると、引っ越しをするぐらい、仕事を変えるぐらいなので家庭の中で

相当不安だったと思います。

だいぶ前の話なので、不登校についてその本人が弱いとか、本人が頑張らないといけないとか、本人に対する攻撃のベクトルが向いていて、他の問題点の方にあまり目を向けないで、本人が本人がと追いつめているようなところがあったように思うのですが、全国的に不登校の子どもさんが増えてくる今の時代になってきますと、本人がというように責めるのではなくて、他にも原因があると考えられるようになってきつつあるのはすごくいいことだなと思います。

今泉佐野市の方でも色々と対応をされていますが、子どもが日々生活している家庭の中での時間が１日の中でも長いわけで、その時に両親が不安になるとたちまち子どもに伝わってしまう、さらに子どもさんも不安になっていくという悪循環になっていくのを見ていますので、できましたら子ども家庭アドバイザーのところをもう少し力を入れていただいて、個別にその家庭のお父さん、お母さんだけではなくて、両親揃って同じ話を聞いて、個別に予約をしていただいて、集団だったら話がしにくい、家庭によっては家庭の事情が色々とありますので、そういうふうにしていただく方に力をもっと向けていただけたら、子どもはもっと家でいるのが楽になってきた場合に、「少し外にでたらおもしろいことがあるかもしれない」というふうに足が向くのではないかと私は感じました。

橋本学校教育課指導主事

ありがとうございます。おっしゃるとおりです。私も学校を見ながら思うところがあって、複合的でして、調査上で主たる理由ということであがっている項目があるのですが、色々ケースを聞いていると複合的です。本人が自分もわからないということもかなり多いです。ここだけではなくて、全国的になります。病院の先生に聞いてもそういう子が多いということです。

周りからの支援が必要だということで、子ども家庭アドバイザーの方も今動きだしていまして、「ここだけの話にしましょう」ということで、何人か、先日は４名程度の保護者の方に集まっていただいて、ある学校でしたのですが、ここだけの話にして皆さん安心して発言してくださって、いろんな話に対してアドバイスをして、よかったなと思うのは、横のつながりというか、苦労していることを聞いてもらう、その方向性だけではなくて横のつながりというか「やっぱりそうなんやね」とか「こんなときはこうやね」という話が自然と少人数で茶話会的な感じで、あえて雰囲気がゆったりとした中で実施したのですが、少しでもそういう場があればと進めております。

甚野委員

まず両親の気持ちも解かしていく必要があると思います。両親も大変なことになってしまったと考えているところがあるのだけれど、それを徐々に解かしていくのは時間がかかるので、それもわかった上で徐々に気持ちを開いていって、安心して話せる場があれば、私は家庭の中が安定すると子どもさんにも良い影響があるのではないかと思います。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

山下委員

入学と同時に不登校になっている子どもさんもいるかと思うのですが、学校内で徐々に不登校になるというのがほとんどだと思います。その中で不登校になってしまう前の前兆がたぶんあると思います。いきなり明日から不登校になるというのは多分ないと思うので、前兆がわかることが１番大切と思います。もちろん不登校の子どもを支援するのも大切ですが、前兆をとらえて不登校にならないようにするのもかなり大切だと思いますので、そういった機関とか、学校の担任が１番身近でしょうし、親からの相談、実際にならないとなかなか相談にもこないと思いますけれども、そういった前兆を捉える方法とかは何かあるのでしょうか。

橋本学校教育課指導主事

どの学校もしているのですが、遅刻が増えだしたとか、例えば３日間連続で休んだとか、基本休んだら当然連絡をとったり、状況によって家庭訪問をしたり色々とあるのですが、例えば３日で必ず全体共有して、そのときは必ず電話をして「家庭訪問をしましょう」とか、ただ家庭の状況にもよりますので、必ずコンタクトをとろうと、早期対応ができるように。またスクリーニングシートといって、全体を客観的に数で分析するための表があるのですが、そこでいろんな専門科の方も入って皆で見ながら、「あの子気になるな、アプローチしようか」という形で、前兆をとりこぼさないように、できるだけ早めに対応できるようなシステムを組んでいます。

各々色々工夫されていて、例えば連絡手段を ICT でもできますよとか、学校へのコンタクトのハードルを下げる工夫をしたり、あとは人と人なので、丁寧に関われるようにということで、例えば４月の最初とか、学期の最初とか、不登校が月で増えるデータもあるのですが、そのときに注視しようとか、そうではなくても基本的に休んだり遅刻したり、何か変化があったときは、そういうサインだと思って早期に対応しようというところは学校の方でも決めて動いております。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

千代松市長

説明があったかどうか見逃していたら申し訳ないですが、１７ページの「新規不登校者数を昨年度の同時期１２月末時点で比べると小中学校あわせて減少している。」令和４年が７４人で、令和５年が５９人になっているのですが、５ページのグラフで新規不登校児童生徒数の推移を見てみますと、令和５年度１２月末は５９人になっているのですが、令和４年度は１２８人となっていて、この数字はどういうふうに見たらいいのですか。

橋本学校教育課指導主事

５ページの新規不登校児童生徒数の方ですが、今年度のものを参考値と言っていたのでややこしくなってしまって申し訳ないのですが、令和４年度前は年間の数字になっていまして、令和４年度の１２月時点での数をここには表示していません。最後の方でグラフの表に記載はないのですが、１２月末時点の数と比べて減少しているということで、まだ今年度が終わっていないので比較する

上での参考値として記載いたしました。前半の方の表には記載がございません。

千代松市長

令和４年度は１２月末迄で７４名、その後５０名ぐらいは３学期で増えたということですか。

橋本学校教育課指導主事

そうです。累積で欠席数を加算していき、基準のラインを超えるとカウントするという方法をとっております。

千代松市長

累積ですか。

橋本学校教育課指導主事

年間３０日を超えればカウントされます。

千代松市長

１７ページの②「不登校の状態にある児童生徒のうち、学校内外の機関等から相談・指導を受けていない児童生徒の割合が減少している。」ということで、受けているからこそ新規の不登校者数が減少しているという成果に繋がるという意味合いでいいですか。

橋本学校教育課指導主事

それも要因の１つであると思っています。中学校からの報告でも、いろんな関係諸機関、部局との関係で家庭が安心して子どもたちが来られていると聞いていますので、要因の１つだと思います。

千代松市長

それが１つの要因ということは、他の要因というのはどういう要因があるのですか。

橋本学校教育課指導主事

そこまで分析はできていなくて申し訳ないのですが、なかなか関係機関と繋がりにくいというところもありまして、ご本人やご家族が困ったというニーズがないと動きだしができないというところで、そういうサービスが提供できないというところもありまして、家庭の中でもどういったアプローチができるかという問題もありまして、そこが新規不登校を減少させるための壁になっております。

千代松市長

質問は変わりますが、１５ページの「さわやかルーム」と「シャイン」で１５名、中学生が９名、小学生が６名で、これが過去最多ということですが、「さわやかルーム」に何名行っているか、「シャイン」に何名行っているか内訳を教えてください。

橋本学校教育課指導主事

先程最高と言いましたのは、小学生の人数が割合で最高です。「さわやかルーム」は１月時点で１２名。「シャイン」の方が３名となっております。この人数以外で、ここ数ヶ月で見学者が増えていますので、また入室も増えるだろうと想定しております。

千代松市長

小学校が今まで６名で最多。ちなみに中学校で過去最多は何名ですか。

和田学校教育課学校指導担当参事

２０名を超えるぐらいです。

千代松市長

ありがとうございます。

「さわやかルーム」が１２名で「シャイン」が３名というのは、中学生が２０名を超えていた時期もあったという中においても「さわやかルーム」の方がかなり人数は多いのですか。

橋本学校教育課指導主事

概ねそういう傾向ですが、校区で一定、原則、分けておりますので、年度によっては「シャイン」の方が多い時もありました。

千代松市長

「さわやかルーム」は元々青少年センターが笠松町にあって、「さわやかルーム」に場所を移したときに「通うのが大変だ」という声が寄せられたこともあったのですが、この１２名の児童生徒はどのように通っているのですか。保護者の方の送迎ですか。

橋本学校教育課指導主事

はい、基本的には保護者の送迎です。

千代松市長

ありがとうございます。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

谷口委員

先日の研修で「親が変わると子が変わる」という不登校の研修があったときに、１番印象的だったのが、今の大人の現状は、忙しいという字のごとく、心をなくすような毎日でたぶん子どもと関わっていると思うのです。

私も子ども３人いる中で、４年生の娘が３年生のときに行き渋っていた時期があって、そのときに子どもをなんとか行かせないとっと考えたときに、「行きたくない」という子どもを丸ごと受け入れられなかったというところがあって、そこから自分の心を深掘りしていったときに、最終見えてきたのが、「不登校にならせてしまう自分の躾が悪かった」と、そこに根本的に心があって、結局目の前の子どもを全然見られていなかったなというのがあって、これは私だけではなくて、不登校になる傾向がある保護者はそうだと思うのですが、あまり大きな声では言えないかもしれないですが、「別に学校に行かなくてもいいやん」って言うぐらい親が緩く接すれば、今４年生で季節も寒いし眠たいので行きたくないという日もあるのですが、そこまで絶対嫌だということもないというところが経験としてあって、まず親が目の前の子どもを受け入れられる体制を作らないと、今後もっと増えていくだろうなということが想像できて、根本的には日々の生活が忙しすぎて、目の前の子どもときちんと向き合っていない。今、目の前の子どもをしっかりと見られていない。忙しいというのは、未来の不安を感じて一生懸命働くという、働くことが駄目なことではないのですが、今家族みんな揃ってご飯を食べる時間が大事なのに、いつも誰かが欠けているとか、もっと心の温もりを感じられる状態を作らないと、先程「無気力・不安」とあったと思うのですが、親が常に未来に不安を感じていると親の不安は絶対に伝染してしまうので、そういうところで何かいつも心が満たされていない、不安、学校自体も安心安全な場所ではないから不安を感じるというようなところになるので、先程の国の「COCOLOプラン」でもそうですし、本市の「課題」として「学習機会等の確保」とあるのですが、たぶん無気力で不安がある子どもは、勉強したいというそこの状態にいたってないと思うのです。大人でもそうだと思うのですが、インフルエンザになって明日の仕事頑張ろうとはならない。まずは身体を健康にしないと、というところだと思いますので、土台となるのは身体の健康と心の安心、親からの愛情だと思っています。

あともう１つ、先生の孤立というのも研修の中でワードであったのですが、泉佐野市の中でも病欠の先生が何人かいらっしゃると思うのですが、すごく現場の先生は忙しくて授業以外のことも業務としていっぱい入ってきています。そうなると、先程おっしゃっていた子どものSOSをキャッチできる、大切なところを見逃してしまう。他の業務に追われて目の前の子どもを見られない状態になってしまってSOSを見逃すようなことになってしまうので、なるべく心をなくす忙しい状態を作らないで、子どもに全力でできる環境作りは必要ではないかと思います。

あと、国も「学びの保障」とか「学習の機会を」とあるのですが、まずは絶対に土台、心と身体の健康というところと、何年生かぐらいから自己肯定感を育む授業をされているのですが、私個人は自己肯定感以上に自己受容、自分自身がどんな部分でも自分を受け入れるということが、自己肯定感よりも大事ではないかと思います。そこを振り返ったときに、はたして大人自身が自己肯定感よりも自己受容できているかなというところを考えると、少し欠けているのではないかなと思うので、まずは親、大人、教師が変わっていかないと子どもの現状はなかなか変わらないと思っていて、自己受容というのは、自分自身が価値のある存在で愛されて、どんな自分でも受け入れてもらえる、「あなたは大丈夫だよ」と言ってもらえるような安心安全な環境をしっかりと整えていかないと、子どもの無気力とか不安とかあったと思うのですが、１０代後半の死亡の理由が自殺という状態がどんどん深刻になっていくのではないかなと感じています。

橋本学校教育課指導主事

土台というところがあって、教育支援センターでも来てすぐ勉強ということではなくて、まずはゆるやかに人とつながる場をつくる。「もう１度来たいな」と少しでも思ってもらえる場をつくるということで、年齢の近い大学生であったりとか、いろんな関係の人と遊んだり、たわいもない話をしたり、ただ一緒にいて楽しい時間を過ごすだけ、それでも来たらいいところで、それを重ねていってだんだんと表情が変わってきて、不思議とどの子も同じ様な形で表情が変わってきて、「ちょっと勉強してみたいな」とか、「こんなことしてみたいな」という欲求がでてきて、そこからみんなで一緒にやっていくみたいなところで、本当にコツコツですが教育支援センターはそういう意味で言いますと、そういうところにアプローチできている場ではないかと思っているので、そこは充実したいと思います。

あとは、保護者のしんどさは当然たくさんありまして、スクールカウンセラー等もいろんな事例があるのですが、子どもというよりお家の人のしんどさに共感したり、何か自分が駄目だと思われている方がいて、「そうじゃない、しんどいやん」ということで、でもこういうことができるかもしれないと繋がっていく、今お話しを聞いていていろんな事例を思い浮かべていたのですが、土台の部分、ベースの部分を大事にしたいと思っております。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

石崎委員

７ページの「不登校の要因」とありますが、これは不登校の子がアンケートで「自分は無気力です」というふうに答えたのでしょうか。

橋本学校教育課指導主事

これは国調査になるのですが、学校が回答しています。本人ではありません。

石崎委員

２６２名とありますが、足しても２６２名にはならないのですが、その他にも何か要因があるのですか。

橋本学校教育課指導主事

教職員との関係をめぐる問題とか、進路に関わる問題であるとか、あとはクラブ活動とか、学校のルール、決まりをめぐる問題とか、生活環境であるとか、たくさんあるのですが、国も同一の項目がありまして、そこで「主な原因」というところで、学校の方で内容を見立てて出していただいております。

石崎委員

先程言っていただいた中で、クラブが原因で不登校になっているお子さんが中にはいるのですか。

橋本学校教育課指導主事

調査結果で見ますと、本市ではそこは出ていないのですが、主たる、主なという複合的なものがほとんどで、いろんなものがあります。

石崎委員

フリースクールもあると思うのですが、それは今何名ぐらい行かれているのですか。

橋本学校教育課指導主事

把握している範囲で５名になっておりますが、教育委員会や学校を必ず通じて入っているわけではないので、民間でありますので、把握もれがあるかもわからないですが、報告していただいているのは５名です。

石崎委員

その５名と「さわやかルーム」「シャイン」と合わせて２０名ぐらいになると思うのですが、その人数は不登校の人数に入っていないのですか。

橋本学校教育課指導主事

不登校の中でそういう状況である子であれば入っております。

石崎委員

「シャイン」とかに通っていてもそれは除外されないのですが。

橋本学校教育課指導主事

調査のルール上は入ります。

石崎委員

勉強の機会があって、通いはじめてはいるけれども、不登校という人数の中にはまだ入っている状況ですか。

橋本学校教育課指導主事

そうです。

石崎委員

わかりました。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

甚野委員

１５ページの「さわやかルーム」「シャイン」の件で、北部市民交流センター青少年分館２階というのは、１階に図書館にある場所の2階になるのでしょうか。

奥教育長

北部市民交流センターではなくて、青少年分館という建物が別にあります。長坂小学校に行く途中にある、体育館の隣に青少年分館があり、そこになります。

橋本学校教育課指導主事

グラウンドの横です。

甚野委員

分館ではない北部市民交流センターで、２階で青少年を支援しているようなお部屋があるのですが、対象が小学生とかではないのですが、私も北部市民交流センターの方に週１回、２回伺うときに、そういう人たちと出会うことがあります。２階に上がって来られるのですが、その部屋に入って行かれるときに少し顔を伏せていたりして、私たちと顔を合わせたくない感じで、面談室に入られるのですが、結構気を使ってそこに来られているように感じていまして、「シャイン」の３名は別の場所と今わかったのですが、動線といいますか、その場所に行きやすくする配慮もあれば、もう少し足を運んでもらえることになる。そういういい場所を設定されているのに活用しきれていない状態かと思いますので、その部屋に行きつくまであまりストレスなく行けるように、何かの配慮があれば、よりたくさんの人が足を運ばれるのではないかと思いました。

橋本学校教育課指導主事

入って行くところの区分ということで、例えば「さわやかルーム」でしたら、大きいところからではなくて、別のところからも入れますよという配慮をしたり、小学生の下校時に重ならないようにあえて時間をずらしたり、あとはボランティアの方と一緒に２人で入りやすいようにとか、できる限りの工夫はその子の状況によって対応しております。

甚野委員

せっかくなので、より多くの方に足を運んでいただきたいと思います。

千代松市長

石崎委員の質問で、7ページのアンケートで「学校が回答」ということを言われていたのですが、担任の先生が回答されているのですか。

橋本学校教育課指導主事

学校として最後は出していただくので、学校として回答をいただいております。

千代松市長

客観的にそういう回答をするのもひとつのやり方ですが、なぜ来ないかというのをいろんな形でアプローチしてみて、本人に聞いてみるのが1番いいのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

橋本学校教育課指導主事

おっしゃるとおりで、学校の支援の中では原因が手立てにつながりますので、これは国の調査の枠組みの中でしている調査ですが、学校や個別の事案については確認をしながら、状況によっては聞きとりしながら動いております。

千代松市長

色々充足している、していないはあるかもわかりませんが、色々なスタッフも増えてきているとは思うので、いろんな形で本人に聞いた中での理由の分析というか、不登校の分析は大事だと思いますので、よろしくお願いします。

赤坂委員

不登校の要因は本人側からの調査は急いでまた分析していただきたいと思います。

それから、①から⑥まである不登校の要因の中で、「無気力・不安」が４９％で半分占めているのですが、内容といいますか、「無気力・不安」はおおざっぱな要因で、色々複合的に②から⑥、あるいはそれ以外に先程のクラブとか複合的に合わさってなっていくのだと思いますが、「無気力・不安」の中の分析ができていないような気がします。ジャンル的に②と⑥と少し違うなという気がしますので、その辺の分析をもう少し詳しくしていただけたらよいと思うのと、いじめということで、いじめが発生した時点で不登校の要因とは別の枠組みがあって、いじめの問題として取り上げるからいじめを除くという形になっていると思うのですが、原因的には不登校の要因の中では、いじめによって不登校になる、３０日以内かどうかわからないですが、不登校になっていると思いますので、重なるかもわかりませんが、要因の中で初期的なときにいじめが関わって不登校になっているということも、データとして頭の中に入れて分析していかないといけないのではないかと思います。

橋本学校教育課指導主事

おっしゃっていただいた「無気力・不安」の分析は国でも問題になっていて、来年度から調査の項目が変わる見込みと言われております。おっしゃっていただいている「無気力・不安」が多いのですが、その要因は何なのかというところで、改めて国の枠組み的にも検討されています。学校でもどれかを選ばないといけないのでこのようになっているのですが、「無気力・不安」とただ単にそれで片付けているわけではなくて、主たる理由が最終的にそうなっている。1番最初は、例えば友達関係とか、いろんな要因から今は「無気力・不安」になっているということでございますので、

その辺の分析はおっしゃっていただいたスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを含めて検討しながらということになりますし、「無気力・不安」についても今後また国の枠組みも変わるのですが、それも併せて分析できたらと思います。

赤坂委員

増加傾向にあるということですので、今のところ支援センターやフリースクールとか、そういう形で子どもたちが行っておりますが、キャパシティの問題で、今後行政としてどういうふうに高めていくのかどうか、他のところでは特認校みたいな形で施設を増やしているところも全国で何箇所かあるように伺っていますので、方向というのがわかっているのであれば教えていただけますか。

奥教育長

キャパの問題は今こういう状況で２６２名中「シャイン」「さわやかルーム」「教育支援センター」に行っている子ども、さらには「フリースクール」にも何名か行かれているのですが、こういう問題でいきますと、残りの子は出てこられてないわけで、キャパを増やすというよりも、アウトリーチ的な取り組みの中で、相談員も含めてもっと繋がり続けるということが非常に大事なことで、キャパの問題にでた、そこの学校に行くこと自体がなかなかできない子もいるかもわかりませんが、集団やクラスには入れなくて、その学校の個別のルームには行ける子どももいるので、そういう面でいうと、それぞれの学校にそういう特別支援ができる部屋を用意して支援していく、そういうところも家庭の教育機能総合支援指導員が活躍するところなのですが、これらを利用していくというところが1番直近で大事なことだと思っております。

「さわやかルーム」「シャイン」にも平均20名前後、もっと多いときもあるかもわかりませんが、そこに来る子どもも増やしていく必要があると私も思いますが、そういうふうな場合のときは、基本的に保護者が送迎、遠いこともあって中学生なら自転車で行く子どもさんもいるのですが、そこに何らかの支援があって、「さわやかルーム」「シャイン」に来られる状況があったら、交通手段的なことも改善しながら、来られるようにしてあげたら来られるという子もいるとは思います。

キャパを今の段階で増やすというよりも、今ある中での利用を、もっと家庭と繋がり続けて、保護者をしっかり支援してあげたり、子どもを支援していくことが、今、私は大事かと思います。

赤坂委員

フリースクールに通う子どもに対して、保護者に対しての助成金が他の自治体や、当市でも助成金はあるのですか。

奥教育長

あります。

赤坂委員

それは、「シャイン」「さわやかルーム」に行かれている子どもさんにも適用されているのですか。

奥教育長

フリースクールは授業料の負担がありますが、「シャイン」「さわやかルーム」は授業料負担はありません。

赤坂委員

授業料に対しての助成ですか。

奥教育長

はい。

赤坂委員

交通等の費用についての助成は今のところないのですね。

奥教育長

ないですね。

そのような手立てをしたら来られる子のケースとかは今までありましたか。

和田学校教育課学校指導担当参事

交通手段といいますか、「なかなか行きにくい」というご意見は聞くことはありますので、送迎が何とかならないかという要望を承ることはありました。

先程のキャパのお話の補足になるかわからないですが、今年度新規が抑えられているということで、完全に分析はできてないのですが、校内支援教室を充実させているというところが大きなところかなと内部では少し話をしておりまして、校内支援教室を整備した学校が今年何校かありまして、そこで新規の不登校が抑えられている事実がございますし、これまで教育支援センターとか学校以外のところに繋ぐとか、教室以外のところに繋ぐというのはなかなか重篤になってから「次どうしましょう」という話をしているケースはあったのですが、今は学びの場は多様であるということが浸透してきておりますので、もっと早い段階から教室でもいいし、別室でもいいし、支援センターでもいいということを提案することができているかなと思いますので、その辺りでは抑えることが可能になってきたといいますか、少し減ってきているというようには思っております。

赤坂委員

フリースクールに現在通っているのがわかっている限りで５名とお聞きしましたが、もう少し行政とフリースクールの綿密な連携をしていかないと、「わかっている限り」という言葉があれば、フリースクールとの連携については、あまり取れていないという感じがします。はっきりとわかっていたら「できているな」と言えるのですが、「わかっている限り」と言われると、「もう少し連携を深めてほしい」という形になると思うので、その辺どういう取り組みをされていくのかお聞きしたいのですが。

和田学校教育課学校指導担当参事

フリースクールについては、ガイドラインを示して連携させていただいているところですが、「５名だと把握」ということで言わせていただいたのは、日々いつ入室されるかわからないので、学校にはフリースクールに通うお子さんがいましたら、市の方に一報いれてくださいとは言っております。それで今いただいているのが５名なので、５名と。それが怠っている部分がありますと５名と言えないところなのですが、フリースクールとの連携につきましては、もちろんガイドラインに書かせていただいているとおり、学校と家庭と教育委員会がフリースクールとしっかり連携しないと出席の扱い等につきましてもできないということもありますので、通われるお子さんといいますか、フリースクールについては、府下にもたくさんありますので、「ここのフリースクールに行きます」というお子さんがいると聞けば、通うそのフリースクールに市教委として見学にいかせていただいて、「どのような支援をしていただけるのですか」という話をさせていただいた中で、ご家庭と学校としっかり連携するということでは、その後も連絡を取り合うといいますか、出席の状況、学習の状況とかも連絡してもらうところで連携しておりますので、今後通われるお子さんが増えてきますと、そういうやり取りが頻繁になる可能性はあると思っておりますので、赤坂委員がおっしゃられたとおり、より一層連携が必要かと感じております。

赤坂委員

それは行政区域内だけですか。行政区域外に行かれる事象もこれからあるかもわからないですね。

和田学校教育課学校指導担当参事

これまでにも大阪市内であるとか、堺市であるとか、選ぶのは自由ですし、オンラインでフリースクールも選べますので、全国ということもできます。

赤坂委員

ありがとうございます。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

千代松市長

教育長の方から校内での支援教室の機能の話があったのですが、各学校で十分確保できているのですか。空き教室もだいぶなくなってきていると聞いているのですが、どのような感じですか。

和田学校教育課学校指導担当参事

各校１部屋を確保できるかというと、なかなか難しい学校もございます。

奥教育長

今不登校が多い小学校や中学校等はなんとか確保できているのですが、不登校の子どもさんが少ないところでは確保ができていない学校もございますし、保護者さんの連携の中で別の部屋であれば行けるとなれば確保しますが、正確にきっちりと確保できているかといいますとそうではないと思います。

不登校については、これまでもいろんなご意見があるように、多様な状況になっています。本市ではあえて「学校には行かない」という選択をしているご家庭は、全ての方にお聞きしたわけではありませんが、たぶんないと考えておりますので、私どもも不登校という言い方が本当にいいのかどうか、不登校というと社会的にも「学校に行かないんやな」と、谷口委員もおっしゃたように親御さんの育て方とかであったり、問題があったのではないかとか、そういう認知をされている傾向がたくさんあると思うのです。そういうことではないと、社会的な認知といいますか、不登校に対する見方を払拭していく必要があって、さらに学校だけでは解決できる問題ではないし、将来的な自立を目指して教育の学びの機会を提供するということが大事なことになってきているので、社会的な資源も含めて、地域全体で支えていくということが非常に必要になってきていると思っております。

大引理事、自学自習の部屋等も「ゆまにてさん」もしていただいていますが、それは市内でもありますよね。

大引読書活動推進担当理事

青少年課が所管ですが、日新小学校の隣に「ゆまにてさん」の建物がありまして、その１階にコーナーがあって、不登校がどうかという取り決めはないのですが、自学自習するための集える施設といいますか、勉強できるお部屋をご用意していただいております。

市の施設では、生涯学習センター１階ロビーもコロナがあけましたので、拡張して２８席ぐらい自学自習で学んでいただけるような場を提供させていただいていますし、生涯学習センターでは、貸館の利用も個別で使いたいという希望があれば案内することもできます。図書館の２階も提供させていただいております。

千代松市長

旭湯の隣も、事務所と繋がっていないのであれば開放してはどうですか。

中岡日本遺産推進担当理事

検討します。

奥教育長

私が何を言いたいかと言いますと、家でこもっているのではなくて、外に出て図書館を利用するとか、いろんな「こんなことがあるんだよ」ということを子どもたちや家庭の人にわかってもらって、少しでも自分の将来の自立のために物事を考えたり、いろんなことを経験するためにも社会的な資源を利用していきながら、学びの確保に努めていく必要があると思いますし、何回も言います

けれども、不登校のイメージをマイナスのイメージではないように、我々もしっかり周知していかなければいけないということは思いますので、大事なことだと思っています。

鍵埜教育総務課長

ありがとうございます。それでは、この議題につきましては以上で終わらせて頂きます。

続きまして、「３．その他」にうつらせていただきます。

まず、「泉佐野市の小中一貫教育について」近藤学校教育課指導主事より説明をお願いします。

近藤学校教育課指導主事

本市の「小中一貫教育」の進捗状況について、説明させていただきます。

まず、「小中一貫教育」の目的は、「地域、学校における児童生徒のより良い育ち」にあります。いわゆる小中ギャップの緩和です。

また、本市では、９年間の学びと育ちをつなぎ、「主体的に学び続ける子ども」を育成することを目的として取り組んでおります。

そして、従来の「小中連携教育」を基礎としながら、本市でも「小中一貫教育」を推進する必要があるとの認識のもと、令和元年１１月に『泉佐野市小中一貫教育基本方針』を策定し、取組みを進めてまいりました。

この「小中一貫教育」というのは「小中連携教育」のうち、「小・中学校段階の教員が、めざす子ども像を共有し、９年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育をめざす教育」と定義されています。

つまり、「小中一貫教育」は、小中学校で、「めざす子ども像の共有」と「９年間を通じた教育課程の編成」が必要になってくるわけです。

では、この間の取組みですが、令和２年度より、まず、長南中学校区をモデル校区として、取組みをスタートさせ、その後、方向性として、長南中学校区だけではなく、全ての中学校区において、施設分離型での「小中一貫型小学校・中学校の実現」に向けて取り組んでおります。

市教委としましては、まず、「泉佐野市小中一貫教育推進委員会」を定期的に開催し、学識経験者、校園長会代表、小中一貫教育コーディネーター、市教委参事らにより、取組みの推進に向けて協議しております。

さらに、各小中学校の「小中一貫教育担当者連絡会」も定期的に開催し、各中学校区で組織的な取組みが進められるよう、学校現場をサポートしてきました。

また、各中学校に、市単費の加配教員として、先ほど申しました「小中一貫教育コーディネーター」を計５名、配置しています。

この「小中一貫教育コーディネーター」が中心となって、各校区で取組みを進めております。例えば、小中学校の教員が一堂に会する「小中合同研修会の実施」、「中学校教員の小学校への乗り入れ授業」、「小学校における専科指導や教科担任制」などが進められてきました。

また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門家や支援人材も小中学校間を行き来し、小中連携をサポートしてくれています。

さらに、９年間子どもをアセスメントするためのスクリーニングシートも全中学校区で作成され

ました。

また、定期的に児童生徒の意識調査を行い、それを取組みの成果指標として、PDCAサイクルで検証し、取組みを進めています。

そして、先ほど申しました「小中一貫教育」の必要条件である、小中学校共通の「めざす子ども像」が、このように設定されました。

しかし、小中一貫教育に取り組み始めた時期と、コロナ禍がちょうど重なり、この間、集合しての交流が難しかったこともありまして、当初の予定よりは少し緩やかに進んでいるというところです。

しかしながら、コロナが５類に分類された今年度は、小中の教職員の交流はもちろんのこと、児童生徒の交流もずいぶん活発化し、つながりが強化された１年になりました。

「小中一貫教育への移行」をテーマにしまして、市教委としては、学力向上、生徒指導、人権教育等、あらゆる担当者会の中で、中学校区で情報交換し、連携する場を意識的に設定しました。

また、小中の教職員を対象に、学識経験者を招いての「小中一貫教育研修会」を開催しました。

そして、また、小中の教職員がお互いの学習内容について理解を深めるため、小学校に中学校の教科書を、中学校に小学校の教科書を送付しました。

これらにともない、小中相互授業参観も活発化しました。

さらに、教科ごとの系統表を作成し、９年間の教育課程編成の準備を進めております。

最後に、次年度（令和６年度）の展望ですが、「小中一貫教育の部分的な実施」を目標に、いよいよ、できる教科から９年間の学びをつなぐ教育課程の編成に取り組んでいきたいと思います。

また、小学校での「専科指導」や「教科担任制」を拡充させること、中学校区内で研究テーマを共有し、意思統一させながら小中相互授業参観の実施、さらには、参観にとどまらず、小中相互の研究協議会への参加も進めていきたいと考えています。

また、今後、地域や保護者の協力を得ながら、取組みを進めていく必要があろうかと思います。

市教委としましては、「小中一貫教育」が円滑かつ効果的に進められるよう、必要な支援及び助言等に努めてまいります。

報告は、以上です。

鍵埜教育総務課長

ありがとうございました。ただ今の報告について何かご意見ご質問がありましたらお願いしたいと思います。

千代松市長

「小中一貫教育」というのは、小中ギャップの緩和という意味では非常に効果的かなと思いますし、その中で色々全国的にも浸透してきているのかなと思います。

以前ある中学校の入学式に行かせてもらったときに、入学式の生徒が今まで経験したことがないぐらいだらけていて、挨拶で「こんなにだらけた入学式に出席させていただいたのは初めてです」と思わず言ってしまったぐらい、メンバーが変わらないということであまり緊張感がなく、そのままの流れで入学式をしている感じで、少し引っかかったところが正直あります。その辺はどうして

いけばいいかという妙案はないのですが、「小中一貫教育」をしていく中で、９年間そのままの流れでいくのではなく、節目ごとにきっちり指導していくような教育課程にしていただきたいなと、お願いしておきます。

近藤学校教育課指導主事

ありがとうございます。あえて本市では緩和とさせていただいているところです。

段差解消、段差を完全になくしてしまうというようなイメージでは本市では考えておらず、徐々に本人も成長していきますし、その発達段階に応じてできるところをやっていくというイメージです。余りに段差が高すぎますと、中学校に行ったときに不登校が増えてしまうという状況も本市で実際に見られましたので、緩和という言い方で取り組みを進めているところです。当然、節目節目で切り替えていくのも大事かなと思いますので、市長ありがとうございます。

石崎委員

施設分離型ということで、長南の場合は小学校１校、中学校１校でいけると思うのですが、日根野の場合は３小学校あると思うのですが、小学校の内に交流されるのですか。

近藤学校教育課指導主事

先程申し上げました推進委員会の方で、そういったところが話し合われていまして、長南ならば小学校同士を合せるところが１小１中でありますので容易であるのですが、他の中学校区に関しましては、小学校が連携し合わないとより良い教育課程が組めませんので、おっしゃるとおりその交流が今後大事になってきますし、今各校で始めているところでございます。

鍵埜教育総務課長

他にございませんか。

皆様よろしいでしょうか。

それでは、報告の方を終わらせていただきます。

事務局から何かございますか。

山路泉州国際マラソン担当理事

資料と一緒にお付けしております「第３１回KIX泉州国際マラソン２０２４ONLINE」をご覧ください。

申し込み期間は先月１月１６日から始まっているのですが、チラシの方がようやくできあがりまして、オンラインのマラソンということで今年度はさせていただくことになっております。

開催期間が３月４日から１７日という２週間にわたりまして、オンラインですのでスマートフォンのアプリであります「TATTA」を使って距離を計測しまして、申し込まれた方のお好きな時間、お好きなコースで、何回に分けてもらっても結構です。合計でフルマラソンを申し込まれた方は４２.１９５㎞、ハーフマラソンはその半分ということで完走を目指していただくというものでございます。定員につきましては3,０００名ということで、3,０００名に達しましたら申込期間を待たず

に締め切らせていただきます。参加費が3,０００円。どちらも同額ですが、支払いはコンビニ等でお支払いしていただくことが可能です。こちらに書いておりますようにシステム手数料が別途必要になります。

フルマラソン、ハーフマラソンそれぞれ完走しましたら、完走メダルと完走証を後日発送させていただきます。また参加賞といたしまして、Ｔシャツ、泉州地域の特産品が2,０００名の方に当たります。申し込みのときに第１希望、第２希望を選んでいただいて、ご希望の商品が当たるかどうかはわかりませんが、そういったことでオンラインのマラソンを今年開催します。

皆様におかれましたら、ご本人さんはもちろんのこと、ご家族、お知り合いの方、皆様にご紹介いただきまして、3,０００名という目標に達しますようご協力いただけたらと思います。

健康のためにも、体力作りのためにも是非ご紹介いただきますようよろしくお願いいたします。

以上です。

奥教育長

歩いてでも大丈夫ですか。

山路泉州国際マラソン担当理事

はい。

鍵埜教育総務課長

他にございますか。

千代松市長

今日のテーマとは全然違うのですが、市長に就任させていただいてから１番最初に取り組ませていただいたことが、「学校教育施設の耐震化」をまず１番最初に力を入れてやらせていただいて、全ての小中学校の部分的に使っていないところとか、耐震化ができないところもあるかもわからないですが、全ての小中学校の学校教育施設の耐震化が終わって、その中では新しく体育館として、第二小学校の屋内運動場であったりとか、日根野中学校の屋内運動場であったりとか、そういうのは新しく建てさせていただくことで今も使っていただいているのですが、耐震改修だけの施設というのは、耐震改修をしてそれなりに改修も同時に併せてやったのですが、校舎自体がかなり古いので、いろんなイベントや授業を見に行かせていただきましたら、傷んできているような状況が大きく見受けられていまして、その中でも耐震の工事は完了してしまっていますので、そういう中でこれから何年間使っていかなければならないというところの中では、やはりこれからは施設の改修に力を入れていってもらいたいなと、学校図書館等は整備しているので、学校図書館を新しく整備したところは非常に綺麗で、児童生徒も喜んでくれていていると思うのですが、例えば、子ども朝食堂をスタートした家庭科室でありましたら、「とてもじゃないが使いにくい」という声があったりであるとか、防火扉や階段のステップなど、かなり傷んできているので、そういう部分はこれからこまめに改修していただきたいなと思いますので、よろしくお願いいたします。

あと、追加として学校給食に力を入れてくださっている田中理事が来ているので、今の状況を説

明してくれますか。

田中学校給食担当理事

ありがとうございます。学校給食の自己式の施設の整備に向け、来年度から本格的な作業に入ってまいります。

議会の議決をいただいてからになりますが、３校ずつぐらいのペースで、５年間で建てていくことを考えております。来年度は第二小学校と北中小学校と末広小学校の実施設計などを予定しております。現在、第一小学校と第三小学校はスペースがありませんので、両小学校の分は北中小学校で作って配送する方向で考えております。来年度に実施設計をしまして、あとの６校分は順に施設を建てながら並行して設計をする形で進めていこうと思っております。今のところ令和１０年度には全部出来上がるような計画で進めさせていただこうと思っております。

また、来年度からオーガニック給食につきまして、予算の関係上、全部ではなく一部導入から始めますが、予算の規模を見ながら段階的に充実させていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

山下委員

１３校の内９校建てるということですか。

田中学校給食担当理事

そのとおりです。

山下委員

４つはどこですか。

田中学校給食担当理事

現時点で建てられないと考えておりますのは、第一小学校と第三小学校と上之郷小学校と大木小学校です。

第一小学校は周辺が住宅に囲まれており、グラウンドも小さく、そこに建ててしまいますとグラウンドがさらに小さくなってしまいます。第三小学校も同じ状況です。上之郷小学校も同じで、大木小学校に関しては、給食施設は校舎から近いところに建てないと、例えば大木小学校でしたらグラウンドを挟んで向かい側に空き地があるのですが、そこを仮に購入できたとしても、校舎からグラウンドを越えて毎日給食を取りに行くということになりますので、それは難しいということで、４つの小学校は親子式の子になっていただこうと思っています。将来的に体育館などの建替事業があった場合に合築などの方法があろうかと思いますので、そのタイミングで考えさせていただけたらと思っております。以上です。

鍵埜教育総務課長

他ございませんか。

それでは、これをもちまして令和５年度第１回総合教育会議を終了させていただきます。

本日は長時間にわたり、活発なご議論をいただき、誠にありがとうございました。

（午後３時３４分閉会）